

症例5 夫の顔を見ただけで 不機嫌になり暴力的になる

- ・ E氏 70才. 女性
- ・ 特記すべき既往症はなし

主症状

症状〔1〕群 どこへしまったかを忘れる。

衣類を裏返しのまま着てしまうこともある。

現在の生活を改善しようとしなない。

2年前から「私、少し変なのよ」と訴え、不安そうだった。

症状〔2〕群 最近、夫に対して反抗的・攻撃的・暴力的である。夫の顔を見ただけで不穏な状態になる。時には、夫を蹴る・叩くなどする。夫婦2人の生活でこの状態が続いている。

生活歴

Eの夫は、昔から几帳面で細かい性格。書類・印鑑・現金などは自分で管理し、契約や大きな買い物も自分です。妻のEにはさせなかった。綺麗好きなのか、妻が掃除をした後もう一度掃除をするようなタイプであった。結局、かなり前から、最初から夫が掃除や調理をすることになってしまっていた。友達からは「いいじゃない。お姫さまみたいで」と言われていたが、Eは不満で、「私は不幸だ」と常に言っていた。2人の娘は現在独身。

【経過】

Eは、夫と2人の娘から自分の存在価値を認めてもらう対応により、経過は良好となった。

【メモ-1】

夫の性格、あるいは考え方により、Eは家庭内で長い間『居ても居なくてもよい存在』となっていた。そのため、「つまらなくて淋しい人生を続けてきた」と、Eは長い間言い続けてきた。このような長期間の「私は不幸だ」という思いが、出現時期を早めてEを認知症に陥らせたようである。そして、自分を認知症に陥らせた夫の存在を、今度はEが否定し、拒否しているのである。このままで行くと、Eはやがて『夫をわからなくなる』という状態へ移行する。

【メモ-2】

この症例に見るEのような女性は、その内容や程度には差があるが、決して少ない数ではない。

このような女性の場合、夫には以下のような傾向がある。

- ・ 必要以上に口うるさい。細かい。几帳面。厳格である。
- ・ 重要なことは自分だけで決めてしまう。ワンマンである。
- ・ 優しさが自分勝手な独りよがりである。妻から自由を奪っている。
- ・ 頑固で変人である。自分の考えを変えない。
- ・ 現金、預金通帳、印鑑などを妻に任せられない性格。

以上のことから考えると、妻を認知症にさせない方法は次のようになる。

◎ 家庭から妻を解放して、もっと自由に、楽しく生活させること。

◎ 買い物や、友人との旅行などを積極的にさせること。妻が、友人からうらやましがられるくらいにすること。

- ◎ もっと妻を尊敬し信頼すること。
- ◎ 夫は自分を反省すること。自分を変えること。

さて、この症例に見る E の夫のような人に限って、妻の記憶力が低下して忘れっぽくなり、ミスが多くなると、あれやこれやと細かく、きちんと出来るまで注意し、叱責を繰り返す、結局は認知症の進行を速めてしまいがちである。

【メモ-3】

次は別の症例の中の一コマである。

あるとき、かなり認知症が進んでいる母親を連れて、子供たちが相談に来た。

私は次の質問をした。

「3+4はいくつですか？」

しばらく考えていたが、母親は回答を見つけることができなかった。

「そんな難しいことはできません」と答え、母親はバツの悪い思いをしている様子であった。そのとき、そんな母親を見て息子が話し掛けた。

「母さん、3+4わかるじゃない」

「え、おまえ……」母親は横にいる息子の顔を見た。

息子は母の顔を見ながら笑顔で言った。

「ほら、母さん、3円と4円でいくらだっけ？」

「え、3円と4円……。それはお前7円だよ」

決まっているじゃないのと言わんばかりの母親の顔であった。

3+4がわからない人が、3円+4円は7円とわかったのである。この場合の「円」と息子の笑顔は、この母親になんと優しい介添えをしたことであろう！ 私たちが靴を履くときの靴べら以上の働きを、この「円」と息子の笑顔は母親の計算能力にしてくれたのである。

前記の E の夫は、この「円」と同じ意味を持っている配慮と笑顔を、毎日の生活のなかに欠いていたようである。

【まとめ】

存在価値を認めてもらえない人生を送ると、認知症の症状はそうした相手(配偶者)の存在価値を否定・拒否するものとなる。